

第9節 身近な環境との関わりの中で様々に表現する

幼児の感性や自己表現は、自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる。幼稚園において、日常の中の事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを友達や教師と共有し、表現することが大切である。

また、幼児が個々の思いや考えに基づいた表現の仕方を教師が気付くことを大切にしていけることが重要である。

ここでは、2年、3年保育混合クラス・5歳児の指導実践事例として、廃材の特徴を生かして様々に表現する姿（事例1「つくった魚、釣れたぞ、魚」）、お店屋さんごっこで他の幼児の意見を取り入れ、友達と協力して表現する姿（事例2「あかぐみ水産開店しました」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P80～P83）

1 幼児の実態（2年、3年保育混合 5歳児クラス 25名）

進級して1ヶ月が経ち、新しいクラスにも慣れてきた。また、今までの生活や園での出来事を通じて、自分のイメージを他の友達と共有し、表現していけるようになってきている。

5月に入り、保護者の協力により、家庭にある廃材を集め、各自で製作に取りかかれる環境を作った。自分一人で作り、表現することを楽しむだけでなく、お互いに協力したり、製作の案を出し合ったりする姿が見られ、友達と楽しく製作に取り組んでいる。

身近な廃材等を、遊びに生かすことにより、様々な物との関わりを楽しみ、興味や関心を深めていけるようにしたい。

2 指導のねらい

- ・様々な形や素材である廃材の特徴を生かし、自ら考え、表現しようとする。（事例1）
- ・自身の考えだけでなく、他の考えを取り入れ、友達と協力して表現する。（事例2）

3 指導を行う際に主に考慮する幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（10） 豊かな感性と表現]

4 内容

- ・身近にある様々な廃材を利用し、工夫して遊ぶ。（事例1）
- ・自分のイメージを友達と共有し、工夫したり協力したりして製作する。（事例2）

5 環境構成のポイント

- ・牛乳パック、乳酸飲料の空容器、BOXティッシュやお菓子の空箱などを保護者より提供してもらい、登園後や昼食後の時間などに各自が自由に使用し、廃材で製作を行えるようにする。(事例1)
- ・家庭から提供された廃材だけでなく、幼児たちから出たアイデアに沿うような教材や教師が必要になると想像した教材を用意し、廃材製作で使えるように準備しておく。(事例2)
- ・幼児が魚等に興味をもてるよう図鑑を用意したり、屋台の雰囲気や伝えたりする。(事例2)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1「つくった魚、釣れたぞ、魚」(5月中旬)

廃材を利用し、自分のイメージに沿ったものを製作し、家へ持ち帰る姿が見られる。自分だけの製作から徐々に複数の幼児での製作になってきている中、乳酸飲料の空ケースや変わった形の箱を動物や魚に見立てて製作したり、箱同士を繋ぎ、大きな製作物を作ったりするようになってきた。またその一方で広告紙や新聞紙を丸め、剣を作るような姿が見られる。(園では「くるくる棒」と呼ぶことが多い)

A児「乳酸飲料の形ってお魚見たいだね。見て見て。」

教師「本当だ。口を開けているみたい。」

B児「僕は、本を見ながらお菓子の箱をくっつけて、大きな魚を作ったよ。」

教師「ずいぶんたくさんのお魚ができたね。大きいものや面白い形の魚がいるね。」

A児「たくさん作ったから、魚釣りしたい。」

教師「魚を釣るのに道具は何だろう。」

A児「釣り竿。どうやればいいのか。」

C児「この剣、釣り竿みたい。」

教師「くるくる棒に糸と針をつければ釣り竿ができるね。」

C児「僕も入れて。棒を作るのを手伝ってあげる。」

A児、B児を中心に魚を作る幼児は、食べたことのある魚や知っている魚の名前をあげ、たくさん種類や形のものを作り始めた。また、くるくる棒を作る幼児たちは、紙を丸めたり、テープを貼ったりなど、作ることを分担し、協力しながら、魚釣りへの準備が始まり、遊びが発展していった。

○事例1に対する評価

(幼児理解)

食品やお菓子の空き箱、乳酸飲料の空容器、新聞紙や広告紙など身近にあるものを使い、幼児自身のイメージを膨らませながら、製作に取り組んでいる姿が見られる。乳酸飲料の容器から魚をイメージし、空き箱の形や大きさ、材質などに興味をもち、魚の形に近づけるのはどうすればよいか考えている姿がある。特にくるくる棒を作る際には、紙を押さえながらテープを貼るなど、複数の動きが必要になるが、友達と一緒にいることで、一人は押さえる、もう一人がテープを貼るといったような役割の分担ができて、作りやすくなるなど、協力して活動する姿

が見られた。

(教師の指導、家庭との連携)

教師は、様々な廃材を用意し、紙の種類の違いやプラスチックなど特性の違いを知らせ、製作に関わっていった。魚が登場する絵本や、図鑑を用意するなど、魚の製作へのイメージが膨らむようにしていった。

幼児は迎えに来た保護者に早速見せ、どのように製作したか伝える姿が見られた。園だよりや保護者との会話の中で、幼児が何をどうイメージして、製作したか伝え、家庭でも引き続き作り、遊べるように幼児の姿を共有していった。

(2) 事例2 「〇〇ぐみ水産開店しました」(6月中旬)

廃材を利用した魚作り、釣り竿作りを通して、魚つりが毎日のように行われるようになってきた。その中で、実際調理をして食べる、クッキーづくりの調理活動があったあとは、魚釣りとままごとが結び付いていった。

D児「今日はまぐろとサーモンが釣れました。」

E児「サーモンを小さく切って。」

教師「どんな料理がありますか？」

D児「ここはレストランじゃありません、お寿司屋さんです。」

教師は他の遊びをしていた幼児たちと一緒にお寿司の絵本を見ながら、注文していった。

F児「先生、お寿司屋さんって名前じゃなくて、あかぐみ水産がいい。」

教師「あかぐみ水産って何屋さんなの。」

F児「魚が泳いでいて、タコやイカ、貝をいっぱい売っているところ。」

その後、幼児達は、あかぐみ水産と命名されたお店の準備をしていった。教師はお祭りの話を引き合いに出し、どのような屋台があるのか、何を売っているのか幼児たちと話をしていく。

F児「先生、自分で魚を釣って食べたことがある。」

D児「イカが棒にささってるのを、この前食べたよ。」

教師「いいね。色々なお店があるね。知っている料理をみんなで作ってみようか。」

幼児たちがそれぞれ知っている料理のイメージを取り入れ、釣った魚を料理し、様々な料理を提供するお店屋さんごっこが始まっていった。

幼児達「いらっしゃいませえ。魚を釣ってください。釣ったものを焼きます。」

G児「ホタテ、ください。」

D児「今焼けます。熱いですよ。」

釣り堀から、魚を釣り、お店の人に渡すこと、お店の人は鉄板の上で焼き、トングを使ってひっくり返す、お皿に盛り付けるなどの沢山のアイデアを取り入れていった。

大きなお店になったことにより、クラス全体や他のクラスの幼児をも巻き込んだお店屋さんごっこになっていった。

○事例2に対する評価

(幼児理解)

実際に行った調理活動を通して、魚釣りだけの遊びから魚を調理することを含めた遊びに変化した。また、お店の名前を決めたことにより、あかぐみ水産とい

う浜焼きのお店に変わっていった。魚から連想されるお店がお寿司屋さんということだけでなく、もっと幅広く今までの色々な経験で得た〇〇水産というお店であった。お寿司に限定しない名前を決めたことにより、幼児たちの様々なイメージ、表現が引き出された。

(教師の指導)

お店屋さんごっこでは、寿司屋さんなどに落ち着くことを考えていたが、想像を超えて、あかぐみ水産という形になった。遊びや表現が教師の考えを超えてきた中で、幼児たちの話を捉えて、生け簀のあるお店や串に刺してあるイカ焼きなど、印象深いものをお店屋さんごっこにうまく取り入れて、対応していくことができたと考えられる。普段の会話の特徴的なものを捉えて、話をしていくことの必要性を感じることができた。幼児たちの身近な環境にあった出来事を踏まえ、遊びを広げていくことにつながった。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

幼児一人一人が興味関心をもっているものを膨らませられるよう環境を整え、自己表現ができるよう手触りや色、柔らかさが違う様々なものを準備しておく。また、他の幼児が興味関心をもてるよう、全体で取り組めるよう教師の声かけなどにより、幼児の興味が向くように促していく。そのために絵本や紙芝居の読み聞かせや素話などを取り入れていく。

(2) 長期の指導計画の改善

幼児は自分で触れる、感じる、表現するなどを繰り返すことでイメージを広げて、表現方法を得ていく。そのため、幼児と幼児、教師と幼児など幼児の発する言葉を捉え、また幼児がどこで遊び、作り、見付け、興味をもつ、などの一人一人の行動に目を配り、特徴のある出来事を拾っていけるか、教師の力量が問われる。その中で、幼児が興味を示すような教材、材料、環境、天気などを教師が自身で体験し、気付ける経験をしていくことが必要である。また、幼児が気付いたこと、感じたことを見守りながら、幼児が表現しようとする小さな動作に気付くことができること、共感できることが大切である。